

## ◎ 神業ニッポン 明治のやきもの 幻の横浜焼・東京焼

岐阜県現代陶芸美術館 学芸員 守屋 靖裕

明治時代が幕を開けると、諸外国から多くの人々が日本を訪れました。彼らは日本の美術工芸品に魅せられ、購入した作品を持ち帰りました。さらに日本の美術工芸品は、欧米で開催された万国博覧会で高く評価されるとともに、海外へ大量に輸出されました。

その中で、華やかで精緻を極めたモチーフによって装飾された輸出陶磁器「横浜焼・東京焼」は、「神業」ともいべき超絶技巧を凝らした品々で、外国の人々の好みを反映して制作されました。しかし、国内に現存する作品が希少で、制作過程や実態に謎が多く、「幻の陶磁器」とよばれています。

「神業ニッポン 明治のやきもの 幻の横浜焼・東京焼」展では、次の構成により、幻といわれるその全貌に迫ります。

- 序章 ～横浜開港～ 「大日本」世界へ発信
- 第Ⅰ章 ～万国博覧会デビュー～ 東京錦窯の誕生
- 第Ⅱ章 ～宮川香山と井村彦次郎～ 横浜焼・横浜絵付のはじまり
- 第Ⅲ章 ～輸出陶磁器の隆盛～ 東京焼・東京絵付の精華
- 第Ⅳ章 ～驚異の横浜絵付～ 陶磁器商、陶磁画工の台頭

本展では、国内随一のコレクター・田邊哲人氏が里帰りさせたコレクションから精選した作品と、日本に現存する優品を一堂におよそ 150 点展示します。本稿ではこれらの中から 5 点の作品を取り上げて紹介します。

### 1. 宮川香山《高浮彫牡丹ニ眠猫覚醒大香炉》田邊哲人コレクション（横浜美術館寄託）



この香炉を見て、目覚めるような衝撃を猫から受けた方もいるかもしれません。蓋の鈕に表された猫は、目を見開き、口を開けて歯を見せ、うずくまって胴を捻って顔を正面に向けます。睨まれているような印象すら受けます。

翻って、日光東照宮の回廊を装飾する彫刻の中に、左甚五郎作との伝承がある眠猫があります。この眠猫は、牡丹の花が咲く中に体を伏せて、目を閉じているさまに表されています。この香炉に目を戻すと、胴部には牡丹が大きく浮彫りで表されています。この香炉に表された「牡丹ニ眠猫」は、日光東照宮の建築装飾の眠猫から着想を得たものです。江戸時代の眠っている猫を、明治時代に目覚めた猫に変えています。これを新時代到来に対する目覚めと重ね合わせて鑑賞するのも、また一興かもしれません。

この香炉を実際に見ると、写真より小さい印象を受けるかもしれません。そのためか技巧が凝縮した印象も受け取れません。猫の丸い瞳や細かい歯、精細な幾何学文、牡丹の凹凸など、目の覚めるような見どころを多く持つ作品です。家に猫がいる方から聞くと、耳の血管が透ける様子の表現や、体毛の精密描写も本物の猫に近いそうです。

## 2. 井村彦次郎、絵付：瓢池園《色絵木菟文足付花瓶》田邊哲人コレクション



この花瓶から受ける第一印象として、木菟の目力を挙げる方が多いかもしれません。丸く見開いた目は眼光の鋭さを感じさせます。

力を感じさせるのは目だけではありません。木菟は何かを凝視しながら体を前に傾け、翼を広げて、足に力を籠めています。木の枝は下にしなっています。獲物を捕らえようと、今にも羽ばたいて飛び立とうとする瞬間を捉えています。

力を感じさせる絵柄ですが、水墨画を思わせる雰囲気も見どころです。木菟の羽毛や木の葉の葉脈などを細密に描き込み、木や花などを濃淡で描写しています。白く抜いた月は夜空に浮かび、金彩で夜霧を表します。

この花瓶は明治 12 年(1879)の作です。絵付は、井村彦次郎から求めを受けて瓢池園が行っています。瓢池園とは、同 6 年(1873)に東京に設立された、絵付の専門工場です。同年のウィーン万国博覧会への出品物を制作した博覧会事務局附属磁器製造所が閉鎖された後、その陶磁画工を擁して瓢池園は設立されました。井村は同 8 年(1875)

頃に、横浜で松石屋の号を掲げて井村彦次郎商店を創立し、外国人の好みに応じた作品を製造販売し、好評を得ました。同 10 年(1877)に職工 200 人余りを雇用し、第 1 工場から第 4 工場まで設置し、画工も 30 人余りを擁して、規模を拡大しました。横浜随一の輸出陶磁器商でした。

## 3. 井上良斎《高浮彫雲龍花瓶》田邊哲人コレクション



花瓶の胴部に雲と龍が立体で表されています。黒褐色の雲はもくもくとボリュームを持って沸き立っています。龍は体をくねらせて、雲の中から顔や足、胴体の一部をのぞかせています。これらの表現は立体感をよく出す「高浮彫」という技法によります。この表現技法からは、3D 感はもとより荒ぶるエネルギーまでも伝わってきます。雲と龍とが一体となって空に浮揚している嵐の情景が、真に迫るように描写されています。

釉薬の掛け方も見どころの一つです。口縁から肩に鉄釉と灰釉を重ね掛けして、褐色・青色・赤色といった絶妙な色合いを現出しています。釉薬を全体に掛けずに、掛け残したところから土味を見せています。

この花瓶の作者は井上良斎(初代)で、瀬戸出身の陶工です。江戸に上った後、慶応 2 年(1866)に隅田川近くの浅草の橋場町に窯を築いて「隅田焼」を始めます。国内向けの製品だけでなく、海外輸出用の作品も手掛けました。内国

勸業博覧会や万国博覧会に出品を重ね、国内外で高い評価を得ました。

輸出向けの隅田焼の特徴としては、東洋的モチーフの人物や動物等を高浮彫で厚く盛り上げる表現

や、褐色や暗緑色、赤紫色などの明度が低い彩色を挙げることができます。この花瓶にもそれらの特徴を見ることができます。東アジアで伝統的に用いられてきたモチーフである雲と龍を高浮彫で立体として表現し、落ち着いた色づかいを採用しています。

#### 4. 宮川香山《高取釉高浮彫蟹花瓶》田邊哲人コレクション（神奈川県立歴史博物館寄託）

花瓶に蟹が貼り付いています。一見すると、この蟹は1匹のように見えます。そう思って見てみると、1匹の蟹にしては、はさみ脚の向きが奇妙な方向に向き、また、脚の本数が多く、違和感を覚えます。実はこの下にもう1匹蟹がいます。計2匹の蟹が重なっています。2匹の蟹を高浮彫でリアルに表現して、花瓶につかまっているように貼り付けるという妙技をこの作品は披露しています。



高浮彫で表現されたこの蟹は、眼やとげ、関節など細部まで詳細に表現され、本物と見紛うばかりです。この蟹ははさみ脚が細くて長く、はさみの先端は鋭く、第四歩脚（最も下に付いている脚）の先端が尖らずに平たくなっています。この特徴はワタリガニ科に見られます。左右のとげが大きく突出し、その間に小さなとげが並んでいるため、ガザミの仲間をモチーフにしたと考えることができます。

また、巧みな色使いも見事です。蟹の緑褐色の甲羅や白い斑紋、脚の青や赤を釉下彩によって表現しています。

この花瓶は大正5年(1916)の作ですが、宮川香山は同じタイプの作品を先行して制作しています。そのうちの 하나가東京国立博物館所蔵の「褐釉高浮彫蟹花瓶」(明治14年(1881))です。鉢形の胴部を歪ませて、篋削りで脚部を形づくった器形や、流下させた釉薬、そして二匹重なった高浮彫の蟹が共通します。「褐釉高浮彫蟹花瓶」は明治14年の第2回内国勸業博覧会に出品されました。近代陶磁としては初めて国の重要文化財に指定された作品です。

#### 5. 成瀬誠志《色絵人物文足付香炉》田邊哲人コレクション

この香炉は、上絵付や金彩によってモチーフを非常に細かく描き込んだ作品です。香炉の表面に窓絵を設けて、その中に人物と背景、花、鳥を極めて緻密な筆遣いで描写しています。白盛りによる六角形(亀甲形)の網目で覆った窓絵もあります。窓絵の外の表面は、空白の存在を許さないかのように、繊細な植物文や連珠文(円が数珠のように連なった文様)などで埋め尽くします。この香炉の作者、成瀬誠志が得意とした細密描写が活かされた作品です。神業というべき細密描写に、金彩による煌めきが相まって華麗な仕上がりとなっています。



成瀬は弘化2年(1845)に岐阜県恵那郡茄子川村(現在の中津川市茄子川)に生まれました。はじめ地元の茄子川焼の陶工となりました。その後、東京に上って窯を築き、輸出向け

の薩摩焼風陶器の制作を始めます。最初は薩摩の土を、後には飯能(埼玉県)や天城山(静岡県)の土を原料に用いて、成形から絵付、焼成までの一貫制作を行いました。第1回内国勸業博覧会(明治10年<1877>))に出品して受賞したり、あるいはエドワード・モースによって、東京薩摩による細密画の元祖と紹介されたりするなど、高い評価を受けました。後に帰郷して作品を制作し、シカゴ万国博覧会(明治26年<1893>))やパリ万国博覧会(同33年<1900>))などに出品して受賞しました。成瀬は東京でも出身地の岐阜でも優れた作品を生み出していた陶工でした。

#### 【展覧会情報】

企画展： 神業ニッポン 明治のやきもの 幻の横浜焼・東京焼

会期： 2020年9月5日(土)～11月3日(火・祝)

会場： 岐阜県現代陶芸美術館

岐阜県多治見市東町4-2-5 セラミックパークMINO内

TEL: 0572-28-3100

開館時間： 10:00～18:00(入館は17:30まで)

休館日： 月曜日<ただし、9月21日(月・祝)は開館>、9月23日(水)

観覧料： 一般900円(800円)、大学生700円(600円)、高校生以下無料

※( )内は20名以上の団体料金

※障がい者、難病患者の方および付き添いの方1名まで無料

